

新規就農の現状と課題

社団法人 北海道農業担い手育成センター

はじめに

農に魅せられた若者が新しい感覚で農業を始めています。そのことが地域の農業者や後継者にも良い刺激を与えています。

こうした人々を農業の担い手として確保するため、平成七年に国の法律制定を受けて本道においても、社団法人として北海道農業担い手育成センター（以下道担い手センター）が設立されました。また、地域では市町村、農委、農協のいずれかに窓口をおく地域担い手育成センター（以下地域センター）が推進機関の活動を行っています。

道担い手センターでは専任職員が相談に当たり、農業を始めたい人には農業研修、短期間の農作業体験を希望する人には農業体験実習を地域センターと連携して、非農家出身者の受入れを行っています。地域の活性化に向けて、農業を目指す人たちが何を考えているのか、また、地域で何が問題になっているのか、よそ者ではなく仲間として互

いに向き合ったために、いろいろな観点から考えてみたいと思います。

就農相談で優れた人材を発掘

一、農業を目指す人たちのタイプ

農業を始めたいと考える人たちが増加しています。農業に対する価値観の変化や社会情勢の変化などから、農業や農村に対する新たな考えを持った人たちが農業や農村に参入しようとしています。これらの人たちの特徴や傾向についてふれてみたいと思います。

一つには、人生観や農業に対する価値観から農業を選択するタイプです。

① 本心に農業が好きな人

相談者の言葉に「高校生の頃から農業が好きでやってみたかった。でも農家ではない者が農業はできないと思います。」と。

社団法人 北海道農業担い手育成センター

札幌市中央区北1条西7丁目1番地（プレスト1・7ビル3階）
TEL 011-271-2255 FAX 011-271-2266
ホームページアドレス：<http://www.ninaite.or.jp/>

首都圏センター

東京都千代田区平河町2丁目6番3号（都道府県会館15階）
北海道J・U（移住）情報センター内（就農コーディネーター）
TEL・FAX 03-5212-2233

関西センター

大阪市北区梅田1丁目3番1-900（大阪駅前ビル9階）
北海道大阪事務所内（就農コーディネーター）
TEL・FAX 06-6344-2717

相談先も無かったようです。このように農業が好きで生涯の仕事として農業を選択する人です。

② 食の安全性を追求する人

輸入ほうれんそうの残留農薬問題に象徴されるように、食の安全性に対する関心が一段と高まっています。自分の手で安全な野菜を生産し提供したい、消費者に顔の見える農業をしたいとする人です。

③ 規模は小さくても経営者になりたいとする人

人に使われるのではなく、意思決定の主体者になりたい、農業をやるためにどんな苦労があっても後戻りはしないと人々たちです。

④ 脱都会者で北海道の大地で子供をのびのび育てたいとする人

家族みんなで汗を流す農業、家族と一緒に食事ができる、自然豊かな良い環境で子供の教育をしたい等ライフスタイルを考えての人たちです。

二つには、社会情勢の変化に対応せざるを得ない人々たちです。

① 終身雇用制度・年功序列体系の崩壊

会社が一生面倒を見てくれる時代は、終焉したと言われています。いつ自分の身に迫るか雇用不安を持つサラリーマンが増えています。国内企業の海外進出により産業・経済のグローバル化が進み、産業の空洞化が進んでいます。デフレ経済に関係が深いといわれるアジア諸国等への企業進出は、急テンポな技術移転と製品輸入で仕事の先行き不安を一層増大させています。

人材が流動化している中で、多様な優れた人材を確保するチャンスが到来しているとの見方もあります。

② 長引く不況で会社等を解雇された人

九月の全国の有効求人倍率は、前年同月を〇・〇二ポイント下回る〇・五五倍と悪化しています。求人者が減少し就職が厳しい状況にあります。これも反映してか、この際、農業でもやってみようかとする人々です。

三つには、農業に対する新たな考えを持った人々です。

① 消費者（生活者）参加型の農業を目指す人

大地で汗を流し生産の喜びを消費者と共有したい、安全な食べ物で自分たちの手づくりしたいと考えている人々です。産消提携としてのラスト活動の担い手です。

② 都市住民と農村の交流拠点としてファームイン等を考える人

グリーンツーリズムの潮流に乗り、新鮮で安全な食材を提供するファームイン、ファームレストラン等の取り組みを考えている人たちです。過疎化が進行し定住人口が減少する中、交流人口が増加することは、地域経済の活性化に良い影響を与えるものと期待されています。

③ 農業の教育的な機能に着目している人

生産活動や農村生活を通して都会の子供たちを山村留学生として受け入れを考えている人々です。環境の良い農村で情緒豊かな人間を育てたい、また、体験ファーム、不登校児童たちの受け入れ等に取組みたいとするものです。

四つには、農村と都市生活の両立を考える人々です。

経験豊富な熟年者仲間と農業をしたいとする人々があります。また、定年を迎えた今、子育てや住宅ローンの返済もすでに終わり、充実した生活を夏は北海道で各人が特技を結集して農業、冬は都会

で生活をするということを真剣に考えて、研究会を持ち知恵を出し合っているグループの人々もいます。

このほか、ビジネスチャンスを探している企業からの相談もあります。

食と農の再生プランを契機に、道担い手センターへも建設業、製造業や医療関係者が農業への参入、生産法人の資本参加について、企業の責任ある人が相談に訪れています。今、農業のあり方について地域の主体的な方向づけが求められていると思います。

二、あなたの地域に農業を目指す人がいます

相談は全国各地から寄せられています。地域毎にどのような職業の人が農業に関心を持っているか平成十三年度の人数で見たいと思います（表1参照）。

農業研修の相談者数は八九人です。職業は会社員がどの地域でも多く半数近くを占めています。次いで失業中の人や主婦等を含むその他となっています。地域別の人数の多い順は北海道、関東、近畿地方で約八割となっています。道内の相談者の中で、ハローワークや就職情報誌等を通して大規模農家で働いている人（農業従事者）からの相談も増加していますので、道内の各地域の足元に農業を目指す人が居ることを知ってほしいと思います。

体験実習は九〇九人から相談を受けています。都会を中心に会社員、学生、その他が多くなっています。

道担い手センターを経由して地域センターが研修等を受入れる人数は、近年三〇〇人前後となっています（図1参照）。農業研修を希

表1 相談者の地域と職業等（平成13年度）

（単位：人）

地域	区分	職 業 等							総計
		会社員	学生	公務員	自営業	農業従事者	フリーター	その他	
北海道	研修	129	22	18	20	27	23	63	303
	体験	40	28	5	5	6	21	35	140
東北	研修	14	4	1	1		1	9	30
	体験	6	8	1	1		3	8	27
関東	研修	132	17	9	17	4	31	42	251
	体験	89	72	5	3	2	55	49	275
中部	研修	43	8	7	9	4	6	16	93
	体験	37	23	8	7	3	17	29	124
近畿	研修	56	24	3	11	7	11	36	148
	体験	74	57	7	7	2	34	56	237
中国	研修	8	4		1	2	1	2	18
	体験	4	28	2	1	2	1	4	42
四国	研修	8			3	1			12
	体験	1	3	1			2	1	8
九州	研修	15	5	3		4	1	6	34
	体験	10	24	3		2	2	8	49
国外	研修				1				1
	体験	1	2					1	4
不明	研修	1				1		2	4
	体験	2						1	3
総計	研修	406	84	41	63	50	74	176	894
	体験	264	245	32	24	17	135	192	909

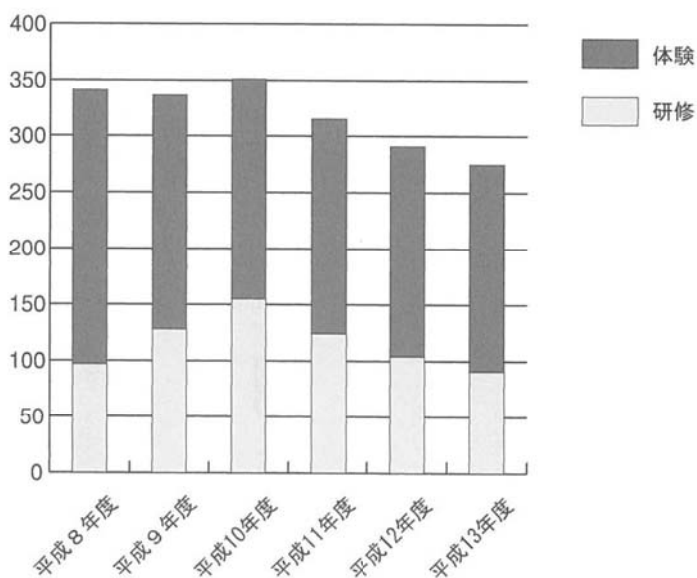


図1 農業研修と体験実習者数の推移

望される方でも農業経験がない方の場合、相談の過程で体験実習を勧めています。そのため、体験実習の割合が増加しています。

三、多様な相談方法で人材を確保

① 就農相談窓口

相談者に対して適切な対応ができるように、専任の就農コーディネーターが七名配置されています。利用者の利便性に配慮し平成八年から首都圏センター、平成九年から関西センターを開設し、相談活動の充実を図っています。

相談方法は、面談、電話、啓発資料に添えた返信はがき、ホームページを通じたメール相談等で日常対応しています。内容は農業以外に移住、教育等の相談まで無い込んでいきます。

② 大都市中心に相談会の開催

北海道で農業を始めた人や体験をしてみたい人は、東京、大阪とその周辺都市に多数潜在していると思われる。そのきつかけづくりに新規就農、Uターン、体験実習等の相談会やセミナーを開催しています。東京会場には地域センターの参加を募り、毎年一〇数カ市町村が参加し、私たちと一緒にブースを持ち、熱心に人材の発掘に当たっています。本年度は一九四人の相談者が来訪しました。

この他にも、全国農業会議所が主催する新規就農セミナー・相談会・農業生産法人会社合同説明会「ニューファーマーズフェア」が本年は全国六か所で開催されました。十一月下旬には札幌でも開催され、道内、東北等から三〇〇人の相談者が訪れました。

また、道主催で全職種を含めた「Uターン北海道フェア」が東京で十一月下旬に開催され、大阪では在阪道府県協議会主催の相談会が十五年二月初旬に開催される予定となっています。

③ 農業視察・体験ツアーの実施

北海道農業の実態や農村生活を体験して、一人でも優秀な人材を確保しようと企画し、地域センターの協力を得て実施しています。本年度は津別町で六名の参加を得て実施し、短い期間の中でも本格的な農業体験が行われました。

求められる地域の受入れ体制づくり

一、知ってほしい受入れの仕組み

多様な相談方法を経てきた相談者は、就農コーディネーターと納得するまで情報交換をします。特に、農業研修の場合は現地訪問を重視し勧めています。その地域の生活や農業事情の把握、先輩新規就農者や就農アドバイザー（二人一委員）の農場訪問、関係者と面談をするようにしています。この機会は、本人の意志固めと地域センターが受入れる人材として適当かどうかの判断に欠かせません。本人が十分納得した上で、研修申込書を出してもらいます。

地域センターでは市町村、農業委員会、農協の機関が協議し、申込者の意向をふまえながら、指導農家等に受入れを依頼します。

こうして受入農家が決まると道担い手センターは研修申込者に通

知するとともに、受入れをする地域センター（窓口は役場農政係等）、受入れ農家や普及センターへ指導依頼の手続きをします。

平成十三年度の受入れ市町村数は、研修が四六、体験が七二となっています。

ここで大切なことは、地域での受入れ体制です。今でも間違いをして、従業員扱いで受入れを希望するケースが散見されます。こうした事例は、研修や体験実習の制度を十分理解していないか、あるいは役場の担当者が理解していても農協の担当者や受入れ農家の認識が不十分な場合もありますので、地元関係者の十分な理解と連携のもと、地域センターの総合的な機能強化が求められています。

二、指導農家での研修や体験の方法

現在、地域センターから指導農家として推薦されている個人農家や生産法人数は、六二〇となっています。受入れ農家は指導農業士やこれに準ずる人です。

研修や体験実習を通して、農業や農村生活を実践的に学びます。

① 作物の栽培や家畜の飼養管理を学ぶ

受入れ農家は、日常、実践的に農作業を通して基本技術の指導、作業のコツ等のワンポイントアドバイスや経営管理等を総合的に指導します。

② 農家生活の理解

経営者の理念、家族の和、家族の家事作業と農作業の役割分担、更にはゆとりある生活のため酪農ヘルパーやコントラクター等の労

働支援システムの活用などを学ぶものです。

③ 地域社会への参加や経済の仕組みの理解

作目部会、研究会、交流会等へ積極的に参加し、人のつながりをつくるのが大切です。また、農協、集出荷施設、市場等の農業生産・販売のシステムを日常的に理解を深めることも、就農に向けて極めて大切なことです。

三、地域全体で担い手を育てる

受入農家段階では指導が難しい理論や知識面の講義については、一部の市町村では役場や研修施設の会議室で普及員や獣医などが講師になり、ゼミナール方式の集合研修を行っています。また、支庁や普及センターが中心となり、広域的に実施されているケースもあり、地域の先進農家や新規参入の先輩農家の視察を行う場合も多いようです。

このような取り組みは、日頃限定されがちな研修者の人間関係が地域の関係機関や先輩農業者、さらには同じ境遇にある研修生同士に広がり、精神面も含めた支援が期待されることから、受入れ農家だけに指導を任せるのではなく、地域全体で担い手を育てるといった視点からの対応が望まれます。

四、受入れから就農への支援

一か月以内の短期間の体験受入れは、一般的に食費は農家負担で手当や交通費の支給は一部地域を除きありません。一方、研修が長期に及ぶ場合は、安心して学び生活ができるように、研修手当の支

給が必要です。この負担は研修者の労働対価の一部として受入れ農家が全面的に負担するところが多い実態にあります。関係機関と自分の負担を工夫している地域もあります。また、道担い手センターの支援策を活用するなど、不足する部分を地域で負担しているところもあります。その他、傷害に対する備えも考慮しなければなりません。

ある期間研修して就農の見通しがつきますと、就農計画を作成し、計画が知事から認められますと認定就農者になります。これにより、就農支援資金（研修資金、準備資金、施設等資金）の借り受けも含め、研修から就農に至る支援の対象になることができます。

地域で取り組んでいる支援策は、道内一〇〇近くの自治体で策定されています。就農時や就農後の奨励金、地代やリース農場の賃貸料の助成、三〜五年間にわたる固定資産税相当額の交付、農地、建物や機械等初期投資の助成、借入れ資金の利子助成、移住住宅の修繕費助成等多岐にわたっています。

地域では独自の財源を捻出したり、各種事業を活用して、ハード面の研修施設や宿泊施設を設ける地域が増えつつありますが、農協が実施主体となって担い手対策を行っているのは、市町村との共同実施を含めても、道内では一〇農協に満たない状況です。

最近、農協から広域合併を控えているので新規就農者の受入れがでなくなると聞くこともあります。しかし一方では、農協による研修宿泊施設の整備、また、JA北海道中央会支所担当者会議での新規就農についての議論などの新しい動きもあり、地域に根ざした様々な取り組みを期待しているところです。

経営開始に向けての課題

道が調査した平成十三年の新規就農者数は、一〇二人と前年に比べ三六人増加しました。就農の方法は耕種経営では借地が多く、酪農はリース農場制度や保有合理化事業等を活用し、初期投資を軽減しています。

一方で、地域により研修が終っても就農地が無いという事態が発生しています。見通しを持った研修者の受入れが望まれます。

最近、経営形態を問わず五〇歳代半ば位の農家から直接電話で「経営を移譲したいので意欲ある人を紹介して欲しい」との問合せが道担い手センターにきています。こうしたケースには、継承まで研修期間と共同経営期間を持つような、新たな継承方式を開発する必要があります。シェアミルカー制度を参考にしたり、コントラクターを利用し、土地や建物は賃貸形態をとる方法も考えられます。

おわりに

高齢や後継者不在農家が経営を閉じています。こうした状況に対し、農業者や関係機関が危機感を共有し、新たな人材を受入れる仕組みを整える必要があります。

そのためには、まずは受入れ体制の整備、そして受入れ後の研修体制の整備、さらには就農並びにフォローアップ体制の整備、この三つがセットになって初めて、地域に根づく人材を確保できると思います。

私たちの新規就農

磯谷郡 蘭越町 及川 肇

はじめに

私たち家族五人は、二〇〇一年、二十一世紀の始まりとともに就農をしました。私たちの就農は、自分たちなりの苦労はありましたが、さまざまな人達にお世話になり、土地・風土・地域・自然など私たちの力ではどうにもできない条件にさえも恵まれた中での就農であったと思います。そんな恵まれた条件に、言い表しづらいことができる感謝の気持ちをこめて、私たちの新規就農までの顛末を紹介したいと思います。

就農の動機

私たち夫婦は、ともに北海道出身（夫・岩見沢市、妻・札幌市）で同じ農業系の大学を卒業し、就職・結婚をしましたが、学生時代には世界と競争をしていかなければならなくなった農業に展望が見えず、というよりは世に言う大学生と同じく、大学生活を親

のすねをかじりながら謳歌し、農業経営や農業情勢については真剣に取り組む姿勢はあまりなく、ただ、学生の本業について問いただされる時のために、かろうじて先生の話の頭の隅に置いていた程度ではなかったかとおもいます。

その後札幌で就職し、妻は農業試験場で乳牛の世話をする仕事に、夫は市町村の依頼を受けて地域の活性化を考えるコンサルティング会社に就職しました。妻の職場は、常に農業や家畜に接し将来実用化されるであろう研究や情報が飛び交う職場であり、夫の職場は主に町村に出向き道内の農山漁村の人達と将来の方向について話し合い、報告書を作成するような職場でありました。

そんなサラリーマン時代の中で、昭和六十三年に結婚し、妻は職場を退職し、一女・一男をもうけ、マンション暮らしをしながら趣味として裏の空き地を借りて家庭菜園を作り、夏・秋には家族四人でささやかな収穫の喜びを味わったものでした。同じマン

及川 肇（おいかわ はじめ）さん



- 1961年 岩見沢生まれ
- 1985年 めん羊管理技術習得のためカナダ・アルバータ州にて1年間実習
- 1988年 帯広畜産大学卒業
- 1988年 (限) ライヴ環境計画入社
- 1998年 (限) ライヴ環境計画退社
- 1998年 蘭越町富岡に転居
- 1999年 新規就農研修開始
現在に至る

シヨンに暮らすご近所の方たちともそれぞれの菜園について情報を交換したり、子供たちが一緒になって土いじりをしている姿は、都会の中での一種の贅沢にも思えたものでした。一時は、こんな贅沢な気分になれる土いじりの魅力にひかれ、後志管内の蘭越町という町の農業委員会を、「農業をやってみたいのですが」と訪ねたことがありました。答えは「いくら財産を持って農業をはじめようというんだい？」と聞かれ、「そんなにお金がかかるものなのですか？」と驚いてしまう始末。趣味の延長に思っていた結末は、あっけなくボツになってしまいました。学生時代からサラリーマン時代を通して、農業や農村と接する環境にいたつもりでしたが、今考えると、農業や農村に関する情報と付き合っていただけで、実際の農業と付き合っていたわけではなかったようです。

しかし、平成七年に次女が誕生した時に、私たちの生活は小さな変化をもたらしました。次女は出生時に障害があり、その後、二年あまりにわたり、手術・入院の日々が続きました。幸い現代の高度な小児医療のおかげで、我が子は退院する事ができましたが、入院していた小児病院では、様々な障害を持つ子供たちがあまりにも多く入院しており、「なぜ、このような子供たちが生まれてくるのか？」という疑問を抱いたものでした。そのことを夫婦で話し合っているうちに、子供を生む私達の何かに原因があり、そのまた原因は、普段の食生活やストレス、生活リズムの不規則さにあるのでは？と思うようになりました。そこで、せめて自分

たちの食べるものは自分たちで作ることはできないものかと考え、たどり着いたのが「農業にチャレンジしてみよう」ということでした。

都会から農村へ

私たちは、「どこで農業をしようか?」という事については、あまり悩んだ記憶がありません。夫は以前、仕事を通じて蘭越町の富岡という集落で生き生きと農業を展開しているグループと出会い、それ以来、こんな農村で共に暮らしてみたいという強い願望がありました。会社を辞め、その二日後にそのグループのリーダーの方に相談に出かけました。その方は、「農業をやりたい」という相談に乗ってくれるつもりでしたらいいのですが、仕事をすでに辞めてきたという話を聞き、慌てて「農業をする」ための相談に変わってしまいました。

富岡で農業をするための家・土地・研修の方法・資金の調達・保証人・就農までの手続き・営農の方法・関連する人達への面会や紹介などなど、すべてのことについていやな顔せずに相談に乗ってくれました。私達にとってこのような人との出会いは、万に一つもないのではないかと、未だに感謝しております。こうして再び町の農業委員会へ相談に行ったわけですが、以前とは違い地元の人達の後ろ支えと趣味の延長とは違った私たちの気持ちを含んでいただき、少し強引ではありましたが、平成十年八月、なんとが蘭越町への移住が実現しました。

蘭越町に越してきた初めの年、私たちは、失業手当を生活費に当てながら、翌年の春から開始する研修の準備と、集落の人達や子供の通う学校の父母や子供たちとのコミュニケーションに専念しました。その時は何も意識せずに、地元の人達との挨拶代わりにと、町のことや農業の話などいろいろな話を聞いたり、自己紹介をしたりしていましたが、このことが今の生活の上でとても役に立っていると実感しています。

私たちの住んでいる町は、六千人ほどの小さな町で、町民どうしは二、三人たどれば知り合いにぶつかるような関係にあります。そんな中で札幌から突然「農業」をやりに来た私たちは、地元の人達には、「知らない人」「見た事ない人」と思われていました。そんなことが、人と会い、話しているうちに「札幌から来た人」「富岡に住んでる及川さん」というように知ってもらえるようになりました。また、農業に関するあらゆることを教えてもらったり、農業に未熟な夫婦二人ではできない作業を手伝ってもらったり、足りない道具を貸してくれたりなど、「すまないなあ」と思いつつも頼めるようになったのも、この時期があったからだと思います。

新規就農者が「農村で暮らす」「農業をやっていく」ためには、自分たちが住んでいるという気持ちではなく、そこに住まわせてもらい、その土地の環境の中で農業をやらせてもらっているというぐらいの、謙虚な気持ちが一番大切であることなのかもしれません。



宅配トマト・野菜
宅配で配送している商品です



研修そして就農へ

私たちは、道の就農支援資金を活用し、二年間の研修を行いました。研修は、移住の時からいろいろと相談に乗ってくれていた同じ地区に住む樫新二氏が引受農家となって、野菜栽培を中心とした研修をする事としました。しかし、研修を行った富岡地区は、稲作中心の地区であり、野菜の栽培は農家の家庭菜園以外はほとんど見られませんでした。引受農家の樫氏からは、「野菜栽培に使えるような資材や基本的な栽培技術の提供、町内で野菜栽培を手がけている人の紹介などはしてあげるから、後は自分たちで情報を仕入れ、栽培し、販売してみなさい」といわれました。実際、この研修を終え就農した時にある程度の自立ができなければ、単なる技術研修に終わってしまう。この研修内容には、抵抗はありませんでした。

研修では、約一・五畝の土地を借り、ハウス三棟で果菜類、露地ではアスパラ・ジャガイモ・カボチャ・ズッキーニ・トウモロコシ・豆類などを作付し、トラクターなどの機械は稲作で共同利用しているものを利用料を払って使わせてもらい、栽培技術は改良普及センターや近所の農家のおじいちゃんにことある毎に聞いてまわりました。販売は農産物をトラックで札幌に運び、知り合いの人達に等を買ってもらう「訪問産直」、箱詰めして宅配便で配送する「宅配産直」、直接畑に来てもらうもぎ取ってもらう「もぎとり産直」という形で行いました。また、これらの販路を確保す

るためにそれぞれの収穫時期に合わせた農園の情報をかかわら版にして、消費者の方に郵送したりもしました。

私たちの農産物は現在でも、すべて無農薬・減化学肥料で栽培していますが、研修の一年目の収穫は、作物の観察不足と管理の不足によりわずかなものとなってしまいました。続く二年目の研修では、前年に発生しなかった害虫の被害に合い収穫時期が遅れ



札幌から休日を利用して手伝いに来てくれた人たち

収量減という事態にみまわれましたが、いろいろな人達に私たちの作った農産物を提供することができました。農産物を買ってくれる人たちの中には小さな農園を応援してくれる人もできて、販売先を紹介してくれたり、休みの日には手伝いに来てくれたり、自然農薬や害虫の天敵に関する情報を教えてくれる人や、実際にその資材を無償で送ってくれる人もおり、こんな人達にぜひ元気づけられた研修期間だったと思います。

研修が終了し就農の準備に取りかかったわけですが、この時に最も大変だったのが一〇年先までを見越した就農計画書の作成と二畝以上の農地の確保でした。私たちの場合、計画書を作成する作業自体は以前やっていた仕事と同じようなことでしたので苦になるようなことはありませんでしたが、予測のつかない自然条件に左右される生産と自分たちの技術の熟度を考えながらどのくらいのリスクを覚悟して計画していけばよいかを悩みました。周囲の人の中には、「数字合せなのだから」という人もおりましたが、もしそれがうまくいかないもので、途中でリタイヤするようなことが起きれば、今までこの地で協力してくれた人達に大きな迷惑をかける事になる。

また、その計画が現実からかけ離れたものであれば、サラリーマン時代にやっていた仕事を否定することにもなる、といった変なプライドのような意識も働いていました。作成にあたっては、普及センター・農協・役場・農業委員会に相談に行き、きびしい判断を聞いてまわりました。



3人の子供



理解者であり良きパートナーの奥さんと

土地の確保については、二鈴という中途半端な広さの土地を貸したり売ったりしてくれる人は少なかつたのですが、幸い集落内で離農して貸し農地を持つている人が、一・三鈴を賃貸し、一・二鈴を売買してくれることになりました。売買してくれる土地の中には野菜の選果や保存場所に利用できる古い廃屋もあって、私達にとってはよい条件の土地を確保する事ができました。このような経過をたどり、平成十三年の四月に無事農業委員会の許可があり、就農することができました。

農園の名前も、消費者の方たちに郵送していた通信のタイトルがそのまま農園の名前として呼ばれるようになり、「Kitchen Garden」とすることになりました。これは野菜を買ってくださる方たちから出た名前であり、私たちも農家の家庭菜園で作られているような野菜を直接家庭の台所へということから、とても気に入った農園名となりました。

今後のKitchenGarden

就農を決意してから五年目になった現在、訪問・宅配・もぎとりによる個人販売と少量の系統出荷による販売を行っています、完全に自立した農業経営とは言えるようなものには至っていません。しかし、個人販売の売上は年々拡大し一般家庭からの注文の他、洋食・和食の飲食店や料理教室の先生や生徒さんたち、地元のスーパーなどからの注文も増えており、農産物を使って料理するプロ、食べるプロ、商品として販売するプロからの直接の評価



取得した土地の中にある古い家で
選果場として利用しています

を得られる事は、私たちの生産意欲を増大させる原動力になっています。

私たちのような個人販売が中心となっている小規模な営農活動は、国民の食料自給を担うという意味では「農業といえるものではない」という人がいるかもしれませんが、もともと資産・資金力・技術もないところからはじめた私達にとってはこのようなスタイルしかないと思えましたし、作る側と食べる側がコミュニケーションを常に取り合い情報を交換することによって、少量でも確実に売れるものを生産するヒントを得る事も少なくありません。

また、私たちの次女は出生時の障害から小学校の特殊学級に通っておりますが、昨年、学校から町内の小中学校の特殊学級の生徒全員で農園見学をしたいという依頼があり、ミニトマトなどを自分たちでもいで食べながら農園を見せたことがあります。普段農場に立ち入ることなどない子供たちの熱心な質問にビックリさせられながらも、小さな農園であれば「こんなこともできるんだなあ」と喜びを感じたものでした。そのほかにも小さな子供がいる家族などが、遠くは東京などからやってきて収穫を楽しんでいく方もおられ、農作業の手をチョット休めて時を過ごすことも楽しい出来事となっています。

今後は、Kitchen Garden 野菜のファンの輪を広げていくことはもちろんのこと、現在野菜を購入して下さっている方たちと、より親密なコミュニケーションをはかれるよう、ちょっとした休憩場所や交流の機会を設けていきたいと思っています。

ます。また、ある程度の栽培技術が身についた時には、私たちの生産スタイルを崩さない形で系統出荷にも積極的に参画していきたいと考えています。

就農を果たして

私たちが担い手センターにも相談に行かずに就農できたのは、数多くの人の協力と信じられないような幸運があったからだと思います。

ただ、今後新規就農を目指す人達すべてが私たちのような恵まれた条件の中で就農できるわけではないことを思うと、就農する側の人達が気を付けなければならないことや、就農者を受け入れる側への要望がいくつかあると思います。

就農者が気を付けなければならないこととしては、自分の理想とする営農スタイルが地域の農業の迷惑とならずに、その農村地域に溶け込むことができるかどうかを事前に考えることだと思います。そのためには、就農するまでに地域の人達の話をよく聞き、話し合いをする事が大切であると思います。また、新規就農者は農業をやるために農村に移住するわけですが、私たちの経験からは、営農することよりもそこで暮らすということが大事な事であり、よい人間関係をつくり農村で暮らすことができてはじめて営農にも専念できるものであると思っています。

一方、受け入れる側に対しては、就農支援のシステムについて地域の自治体・農協・農業委員会・道の連携をスムーズに行って

ほしいという事です。私たちのケースでは、研修から就農に至るまでの事務手続きなどが理解されておらず、どこに聞きにいったも分からないといったこともありました。

また、就農する際の確保すべき農地面積は営農形態によって違いますが、二畝という面積が限りなく固定化された考え方でして捕らえられているところがあたり、就農計画上、農産物の価格設定においてあくまで系統出荷価格に準ずる傾向にあったりなど、小規模からスタートしなければならぬ新規就農者にとっては、厳しい条件となるものです。長期に及ぶ就農計画においては、もう少し段階的な要素を加味した配慮がされるべきであると思います。

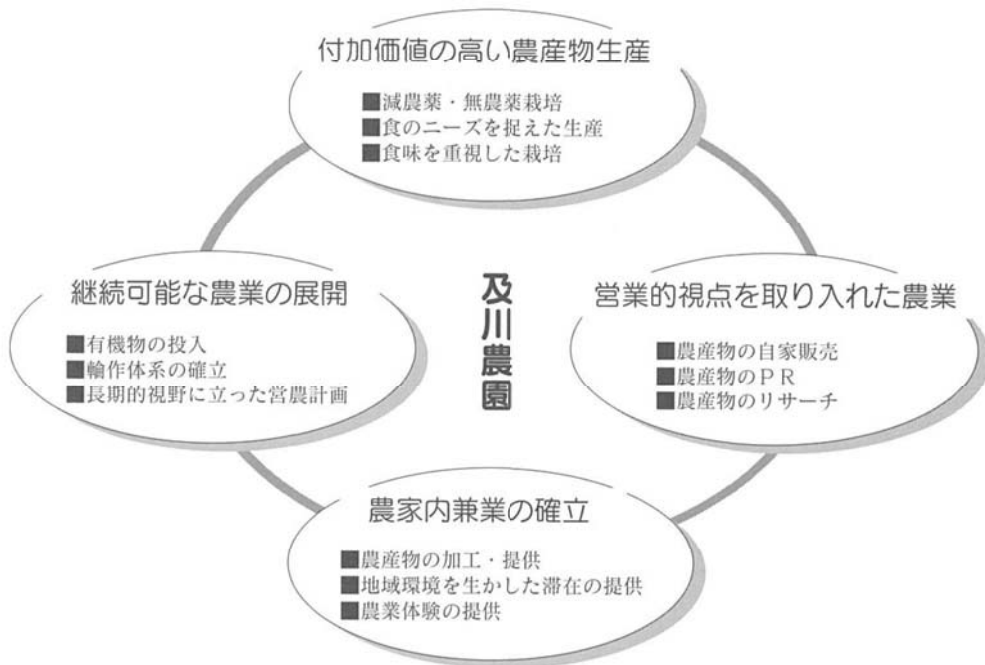
私たちの就農は、現在も農業の細部にわたるシステムや日々進歩する技術を、「聴きたい」「知りたい」「やってみたい」という気持ちで進行中です。これからも多様な情報を受けとめられる感覚のよいアンテナを持ち、糸電話のように直接消費者の方とつながりを持った農業を展開していきたいと思っています。

目指す農業の基本的考え方

私達が就農し目指す農業の姿としては、付加価値の高い農産物生産、継続可能な農業の展開、営業的視点を取り入れた農業の展開、農家内兼業の確立を基本的な考え方として営農していきたいと考えています。

付加価値の高い農産物生産においては、地域条件や作物の特徴

農業の基本的考え方



に合せできる限りの減農薬・無農薬栽培を実践し、これらの特徴を自家販売あるいはクリーン農産物の販路にのせていきます。また、近年の多様な料理ニーズを知り、食材として必要な作物の栽培や食味を重視した農産物の栽培を行っていきます。

継続可能な農業の展開においては、生産基盤的な面において有機物の投入、輪作の実践を心がけ、地力の維持・保全に努めます。また、経済的な面においては、長期的視野に立った営農計画を立て、自己資金を超えるような農用地・大型機械・設備に関する投資は、極力避けるようになります。

営業的視点を取り入れた農業の展開においては、既存の系統出荷販売に加え、農産物の自家販売を行い、農産物のPR、リサーチを行いながら農産物の販路を自ら広げていくことにより経営の安定を図っていきます。

農家内兼業の確立においては、地域の農業の現状を見たときに、安定専業に達するような規模の拡大は難しく、兼業による農業経営は避けられないものと思われます。このため将来的な展望ではあるが農業の持つ多面的な機能を発揮させ、農産物の加工・提供を目的とした飲食店の展開や、地域環境を利用した農村における滞在・農業体験の提供など、営農地内で可能な業態を確立していきたいと考えています。

新規就農をめざして

磯谷郡蘭越町 若山 英俊

一、新規就農にいたる経緯

今、私たちを取り巻く環境は、経済の長引く低迷により非常に厳しく、未だ回復の兆しも見えてこない状況にあります。特に、農業情勢においてもBSE問題、食品会社による偽装事件、野菜の残留農薬問題、無登録農薬使用問題など消費者の食に対する信頼を損ない、世間から今ほど「食の安全」が注目されている時代は無かった様に思われます。昨今のテレビ番組でも、レシビはもとより食材に重点を置いた物が増えている事にも反映されていると思います。

そのような情勢の中、私は新規就農を目指した訳ですが、もとも私は飲食店に興味があり、過去に自分で飲食店を自営したり、食材卸の会社に勤務していた時代がありました。その業務の中で自然と意識するようになった事は食と農の関わりについ

てでした。

そして、農業へ関心を持ちつつサラリーマン生活を送っていた私にとって一つの転機となったのは、学生時代の同級生が蘭越町富岡で新規就農を目指し研修生活に入ったことでした。この同級生との付き合いは、かれこれ二〇年以上になりますが、この話を聞いたとき、奥さんと子供三人いて思い切った事をするものだと感心したり、たいした経験も無いのに大丈夫かと心配したり、そしてすこしうらやましく思ったりしていたものです。こうして私は蘭越町へ遊びに行く機会が多くなっていました。

何度か遊びにいくうちに、地元の方と話す機会もでき蘭越町の自然、景観や蘭越町が北海道のなかでも大変美味しい米の産地である事、「富岡みのり会」の存在などを知る事となりました。

この「富岡みのり会」の存在は、大変面白く、もともとは集落の農家若手後継者による地元の活性化を考える会（最初の名称は

若山 英俊（わかやま ひでとし）さん



- 1962年 釧路市生まれ
- 1984年 帯広畜産大学畜産学部農業工業科卒業
- 1984年 関東共立エコー物産（株）入社
- 1985年 天心ラーメン弥栄店開業
(友人と共同経営)
- 1990年 (株)アートコーヒー入社(札幌支店勤務)
- 2000年 蘭越町大谷団地へ転居
- 2001年 新規就農研修開始
(引き受け農家 樗 新二氏)
- 2002年 蘭越町字富岡へ転居 現在に至る

地域活性化研究会)であつたらしいのですが、現在の会員は農家、非農家に関係なく構成されており、春の防雪柵の解体、夏の盆踊りや、町営宿泊施設「ふれあいの郷」の運営など、色々な意味で今では地域になくはならない存在になっています。

また、この富岡という地域は、よくある田舎特有の排他性が希薄な所で(自分が気づかないだけかもしれませんが)、特に他所の土地からきた新参者にとっては地域に馴染みやすく、土地柄、人柄の器の大きさを感ぜさせてくれる所でもあります。

この様にして、農業と富岡という地域に魅力を感じた私は、新規就農を目指しました。

二、研修内容

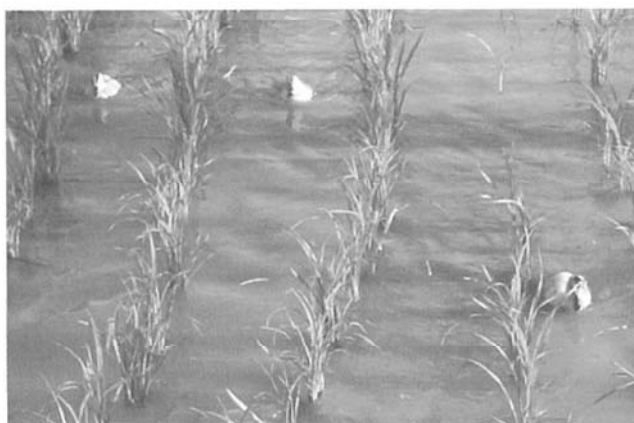
就農するまでの二年間を用途に研修期間とし、就農支援資金(就農研修資金)を利用し、受け入れ農家は、前出の「みのり会」会長の樗新二氏に引き受けてもらえることになり、研修生活に入りました。一年目は、樗氏が米農家という事もあり、主に稲作に関わる作業技術の取得、二年目は樗氏の意向もあり、稲作に加え施設野菜なども大幅に作付けし、野菜の栽培技術なども研修しました。

以下に、主な研修内容を作物ごとにまとめました。

- ◆ 稲作・・・ほしのゆめ、きらら397 作付面積 約7%
- 研修内容 耨蒔き、育苗、田植え、水田管理（畦草刈り等）、防除、稲刈り、乾燥・調整、出荷。



稲刈りは、農家4軒が集団となり、富岡ライスセンターを運営し稲刈り、乾燥・調整、出荷までを共同作業し、4軒でコンバイン3台にて約30%の作付面積をこなす。私は主に、センターに入り、乾燥・調整の研修を行った。



生後3週間程度で水田に放す。「みのり会」にて5%程度の水田だが試験的にアイガモ農法の試みも行った。私はアイガモの放田までの管理と放田後の水田管理を手伝った。ちなみに、田植えは町内の小学生が農業伝承塾の一環で行った。

- ◆ 畑作・・・ハウストマト、スイートコーン、かぼちゃ、グリーンアスパラ
研修内容 播種、育苗、定植準備（施肥・耕起・マルチ敷など）、定植、
収穫、選果、出荷。



ハウストマト・・・苗数 1500 本 品種 ハウス桃太郎
ハウス内では、他にナスビ、ピーマン、ミニトマト等も栽培した。



スイートコーン・・・苗数 14000 本 品種 味来
時期を 3 回に分けて育苗・定植した、圃場は休耕田。他に、露地栽培
ではかぼちゃ、グリーンアスパラの栽培研修も行った。



自作の住宅と4駆の愛車

前記の他に、J A・普及センターによる青空教室への参加、古農機展示会の視察、野菜直売所の設置なども研修しました。

三、今後の課題

- ① 農作業機械の作業技術・知識。
- ② 天候等の諸条件を考慮した作業の優先順位の判断。
- ③ 定植作業等の適期判断。
- ④ 各農作物・各品種の特性・生育条件等の性質。
- ⑤ 各作業における正確性・重要性・作業スピードの度合い。
- ⑥ 肥料・農薬に対する知識。

以上が研修中に得た課題であり、まだ気がつかない点が多々あるとは思われますが、今後この課題をより早く解決していく為に、近隣農家、J A、普及センターなどより情報を得たり、指導を仰いだりしていく事が大変重要になってくると思われれます。

四、営農にむけて

この様な経過を経て、今春より営農する予定ですが、今後一番念頭に置いておかなければならない事は、技術面、資金面でかなり不足している私が、どの様にしたら農業を続けていけるかを常に考え実践していかなければ、すぐに行き詰まってしまうという事です。実際、何十年も農業を続けている先輩達のすべての人が、けっして楽な生活を送っている訳ではありませんし、むしろ楽な

生活をしている人の方がすくないでしょう。

また、全国には約八万箇所の市民農園、貸農園があるそうですが、そこで農業体験をする人たちは農業を使わないで作物を収穫する難しさや、毎日食べている野菜の価格が労働に対していかに安いかを実感するそうです。私も研修を経験して思う事は、一次産業の中でも、これほど労働力と賃金が見合わない職業はないのではないかと感じました。仕事してもサラリーマンの様に一ヶ月先に決まった給料がでる訳でもなく、むしろ一ヶ月先にお金になる作物などはほとんど無く、三ヶ月、半年、一年を通じてやってお金になる作物の方が多いでしょう。サラリーマンを続けている方が、よっぽど楽な仕事と生活が送れていたと思います。しかし、農業にはその様な現実を考慮しても、それ以上の魅力と可能性があるのでないかと私は思っています。

ただの生活手段として農業を選んだのであれば、他にもっと割りのいい職業はいくらでもある訳ですから、わざわざ困難な道を



選ばなくとも良いことになります。また、なんらかの魅力や可能性がなければ日本の農業人口は今以上に減少しているのではないかと思われまます。

ただ、魅力と可能性の追求は農業に何を求めるかで違ってきます。人によっては、金銭面であったり、収穫の喜び、消費者の好反応であったり、自然を相手にしての作業だったり様々であろうと思います。

「継続は力なり」という言葉にもあるとおり、農業を続けていく事で見えてこないものがあると思います。この農業を継続していくことが、私が今一番目標としている事です。

この先、一生生涯農業していく為には、今後、想像もしなかった様な諸問題をクリアしていかなければならないと思います。問題に直面した時、頼りになるのはやはり近隣農家の先輩の方々だと思います。そういう意味では蘭越町富岡の人達、特に「みのり会」の方々は非常に頼りになる存在です。これからも今まで以上に世話になるとは思いますが、少しでも早く逆に頼られる人間になりたいと思います。

また、長期展望としては地域に溶け込み、ある程度の農業基盤が出来た時点で、産地直送の取り扱い、直売所の開設、農家レストランの営業などをやりたいと思っています。

この様にして農業を続けて行くことができたなら、一生涯の仕事として農業を選択した事が自分にとって正解であり、今後充実した生活を送っていけると思っています。